

熊毛地区 社会教育委員だより

発行 平成30年2月
協賛 熊毛地区社会教育委員連絡協議会

異年齢集団活動のすばらしさ

屋久島町社会教育委員連絡協議会

議長 泊 秋敏

屋久島町の社会教育委員に委嘱されて七年が過ぎようとしています。就任当初の戸惑いもなく、子どもたちの健全育成のため、指導者として頑張つて活動を続けています。

熊毛地区子連会長は県子連の理事でもありますので、十一月の初めに平成二十九年度九州地区子ども会育成研究協議会沖縄大会に参加させていただきました。同じ九州管内とは言え、遠路沖縄県の大会に九州各県の子どもの指導者の方々が大勢参加されており、心底敬服した次第です。

私の参加した部会協議では「子ども会の継承と地域・学校・行政との連携」について討議が行われましたが、九州地区の殆んどの子ども会が自分たちと共通した課題を抱えている事を知ると同時に、屋久島町子連の活動に少しだけ自信をもつことができました。屋久島町子連では子どもが「主体的に活動する子ども会」を目標に年間二つの子ども会が「モデル子ども会」として活動を行っています。指定を受けた子ども会は、年一回子どもたちだけで活動計画を立て、町子連からの助成金を考慮しながら生涯学習大会や総会における活動発表までの全てを子どもたちだけで行っ

ています。少しは大人にも相談しますが、数多い年間行事計画の中で一つだけ子どもたちだけで企画・立案・実施させることに意義があるのです。自分たちで企画した一つの活動を成し遂げたとき、「自分たちだけでやり遂げられたのだ」という達成感を味わうことで、子どもたちのやる気が増して子ども会活動がさらに充実したものになると思います。

次に屋久島町が取り組んだ「さわやかあいさつ日本一」運動に、子連も協力しています。その一つが各集落に看板を設置する「あいさつ看板作製」です。パネルや塗料、その他全てを町子連が支給しますが、看板は子どもたちの話し合いで構図が決まり、子どもたちだけで仕上げます。作製過程では、下書きや塗料を使つての細かい部分は中学生、広く塗る部分は小学生というように、それぞれがしっかりと役割を分担して小中学生全員参加の楽しい看板作製となります。



あいさつ看板作製(松峯子ども会)

二つの活動を紹介しましたが、屋久島町子連ではこのような活動を通じて異年齢集団活動の定着を図っています。異年齢でのコミュニケーションや体験活動は、子どもたちの自己肯定感や規範意識を高めるとともに、地域への愛着を深めるなど、今後の地域活性化において大変重要であろうと思います。

少子化や情報化の進展など急激な社会変化により、人間関係がうまく作れない子どもたちが多くなっている現在、兄弟・姉妹のいない子どもたちの中には、友だちとの人間関係

がうまく作れない子どもが多い気がします。子ども会活動を継続することにより、年齢の異なる多くの友だちができ、楽しい時間が過ごせ、人間関係もうまく作れるように成長していくのではないのでしょうか。これが子どもたちの異年齢集団活動の素晴らしきところであり、また意義深いところだと思います。

私たちは指導者は、子ども会の活動を継承、活性化するため、地域や学校と協働し、「地域の子は地域で守り育てる」活動を推進していかなくてはならないと考えます。



おみこし作製(平野子ども会)

人と自然の環境に抱かれる社会教育

屋久島町立安房中学校 校長 竹本 准

屋久島で特色ある社会教育といえ、自然環境の中での社会教育でしょうか。かつてないほど地球環境が人の営みによって変化してきている今、水力発電で電力を賄っている屋久島は、CO2フリーの島となる可能性を持っています。そんなユニークな世界自然遺産の島である屋久島で、環境教育を実施することには大きな意味があると思います。屋久島環境文化財団の研修センターには、毎年延べ七千人程度の方が訪れて、インスタラクターの手ほどきで環境学習を行っています。利用者は県外の研究団体や学校が多いのですが、町内の小・中・高等学校の児童・生徒はもと

よりPTAや婦人会、幼稚園、子育てグループなどもよく利用しており、野外活動や環境学習を楽しみむ中で、大いに語り、笑い、動くことで私たちの住む地域のつながりを確かめ合う時間が生まれています。特に山間部ではかできない、薪を使った野外調理などを通してのコミュニケーションが効果的で、参加団体の中に良い空気が吹き込まれます。

近年、里地では各集落単位での新しいお祭り(安房では「夢祭り」「とびうお祭り」)が生まれ、夏から秋にかけては運動会と祭りです。毎週土日は賑わいが続きます。商工会をはじめ、各種団体の力で準備されるお祭りにも、地域の絆を深める大きな力があります。



野外炊飯

**西之表市校外生活指導連絡会の取組
青少年の健全育成のために**

西之表市校外生活指導連絡会

会長 田中 恭二

西之表市校外生活指導連絡会は、心豊かたたくましく生きる児童生徒を育成するために、関係機関・団体と連携し校外生活指導の充実を努めるとともに、犯罪被害を未然に防止するため、安全・安心な地域づくりを積極的に行うこととしています。年三回の連絡会(総会)と学校の長期休業期間及び八月の鉄砲まつりにおける校外補導を活動の中心として

しています。

連絡会(総会)は、六月、十一月、二月の長期休業の前に行い、休業期間及びその前後における本市共通の生活指導事項(申し合わせ事項)について確認を行うようにしています。主には、道路の横断や自転車のヘルメット着用など交通マナーの厳守についてや、帰宅時刻や夜間外出・外泊など外出について、飲酒・喫煙・万引きなど非行防止について話し合いがなされます。特に最近では、スマホや携帯電話、インターネットなど情報端末の使用については、この連絡会において、スマホの使用時間は午後九時までとする『9時オフ』を提唱しています。これは、相手に迷惑をかけるマナーとして、また、中毒化や昼夜逆転を引き起こし、不登校の引き金となりやすい「習慣化」の抑止も狙っているものです。併せて「使う場所を決める」「ファイルタリングをかける。」など、家庭内のルールを決めることをお願いしています。

この総会においては、輪番で担当校を決め、二校ずつ年間計六校の事例発表を行っています。児童生徒の校外生活の現状と課題及び今後の具体的な取組について研修できる良い機会となっています。



校外生活指導連絡会(総会)

また、市青少年指導センターと連携し、地域補導活動や合同補導活動を行っています。特に、八月の鉄砲まつりでは、管内全ての学校の指導員に参集いただき、祭り途中と終了後の二回に分けて補導を行います。今年の合

同補導には、延べ五十九人が参加し祭り会場を中心に巡回しました。幸い非行につながるような問題行動は発見されませんでした。児童生徒が外を歩かなくなっている現状も要因としてはあると考えています。問題行動が校外から屋内へ移ってきているとの指摘もあります。

本市に住む全ての児童生徒が、健全に安心して生活できるよう、現状に慢心することなく、これからも各関係機関と連携して引き続き息の長い活動に取り組みたいと思います。

青少年教育に携わり、思うこと

西之表市教育委員会

社会教育課
主事 渡邊 仁

さて、来年の体験活動は何を実施しようか。毎年、年度末のこの時期に悩む事項です。西之表市教育委員会社会教育課では、年間登録制の体験活動事業である「ふるさとまなび隊」、夏休みを利用した「ともだち大作戦!」中1ギャップ解消事業」などの体験活動を毎年実施しています。

「外で遊ぶ子どもたちの姿を見ることが少なくなかった」と言われだして久しく、現在も地域の公園などで遊ぶ子どもたちの姿はなかなか見られないままです。そのような中で「日頃体験できないこと」をモットーとした体験活動事業を実施することで、「子どもたちの視野を広げたい。健全に育ってもらいたい。」のような思いで体験活動の実施計画を立てています。

これまでの体験活動を振り返ってみると、社会教育関係団体だけでなく、本場に多くの

方々に協力をいただいていることに驚きます。社会教育課だけでは到底実施できないような体験も多く実施させてもらっています。近年では、各校区に配置されている地域おこし協力隊員から、「一緒に地域を盛り上げる活動を実施しませんか。」と逆にアプローチをいただくこともあり、人と人、そして、関係団体間の繋がりによって、地域の子どもたちは健全に育まれているのだと実感します。また、小学校が閉校・休校となつている校区（鴻之峰小学校・中割校区、立山小学校・立山校区）での体験活動や交流活動では、各地域の方々から「地域に子どもたちの声が響き渡るだけで元気がもらえる」という嬉しい言葉を多くいただきます。このような様々な繋がりを持った体験活動は、子どもたちの健全育成だけでなく、地域も元気にしてくれる活動でもあるのだと、改めて実感します。



ふるさとまなび～隊

このような活動を実施するためには、これまで協力をお願いしてきた関係団体との持続可能な協力体制の構築を目指しながらも、アンテナを張り続け、新たな団体との繋がりを生み出していかなければなりません。子どもたち一人一人が、ふるさとの自然や文化を身体いっぱいと感じ、どんなに小さくても新しい発見が生まれる、そのような体験活動の実施を目指し、青少年教育の充実を図ってきたいと思えます。

よっしゃー、プレゼントだ

南種子町連合青年団 団長

南種子町社会教育委員 上妻 翔平

サンタクロースからのプレゼントを無邪気に喜ぶ子どもの声が、クリスマス夜の響きわたります。私たち青年団が、この「クリスマス大作戦」と称し、サンタに扮して町内の子どもたちにプレゼントを届ける活動は、今年度で三回目を迎えました。冒頭のセリフの子どもは、私たち青年団によるサンタを小学生になつた今も本物のサンタと信じているようです。

町内の子どもは段々と減少してきており、子どもに接する機会はもちろん、街中で目にする機会も減ってきました。この「クリスマス大作戦」はそんな子どもたちと触れ合うことが出来る貴重な機会です。様々な活動を通して地域の子どもたちと交流をすることが出来るのでしょいか。

私が小学生の頃、伝統芸能を学ぶ活動の一環として棒踊りをしていました。思い返してみれば、その棒踊りを教えてくれたのは地域の青年団であったと記憶しています。社会人になつて青年団に入つてみると、そのような活動はほぼなくなっていました。

今年度は団員の数が増加し、長らく開催していなかった青年祭の復活を考えています。これを契機として、青年団を更に盛り上げ、子どもたちに



南種子町連合青年団

何か伝えられるような、地域を盛り上げられるような活動をしていければと思っています。

地域コミュニティを考える

南種子町教育委員会 社会教育課

社会教育係長 坂口 伸二

地域の活性化と、住民が安心して生きがいのある生活を送るために、地域コミュニティの充実が必要不可欠だろう。本町でその中心となるのが自治公民館活動である。中央に位置する上中地区を除く七地区では、人口の減少による様々な課題が顕在化しており、特に若い世代の減少から、地域活動においても役員や活動の担い手の年代が上がるなど、個人の負担が増し、結果的に活動自体も縮小しているのが実情である。

しかし地方創生の観点からも、これまでのような行政主導ではなく、地域住民がより主体的に地域の在り方を考え、取組を進めることが重要視されており、今後の社会教育を推進するうえでも念頭に置くべきことである。

そのような中で、年度当初の公民館長研修会において、垂水市大野地区公民館長、前田清輝氏を講師に、「リーダーの役割」という演題で講演を実施した。垂水市は各地区で十年計画を策定し、長期的な地域活動の指針として活用されている。本町の今後の取組を進めるうえでも大変参考になる研修会であった。

私たち職員も、一人の住民として、これらの地域がどうなっていくのか、自分たちに何が出来るのか、何をすべきなのか、悩むことも少なくない。地域の方々との対話を大切にしながら

から、意識の高揚とそれぞれの地域に合った取組を引き出せるかが鍵となる。社会教育の推進を通して、これまで以上に地域と密接に関わりながら、協働での地域づくりを進めていきたいと思う。

青年団活動について

中種子町連合青年団 団長 鎌田 紘佑

私たち中種子町連合青年団は、現在約三十人で活動しています。少子化、過疎化の影響もあり団員数は減少し、団員数確保が非常に難しくなっています。そのため、なかなか昔のような活動ができないのが現状です。その中で、こうしたらより良い活動を行えるかを試行錯誤しながら活動しています。

私たちの年間活動のメインとなるのが二、三回を数える「ちびっこふえあ」です。これは、青年団主催でゴールデンウィークに子どもたちが楽しめる催しをと開催しています。「ちびっこふえあ」にあたっては、半年前からどのようなものにするか話し合いを重ねていきます。前述しました通り、団員数も減少している中、なかなか思うような内容にはできず、苦心しています。その中でも、西之表市青年団や種子島中央高校のべにんこ、種子島アクションクラブにお手伝いをいただきながらなんとか子どもたちにも楽しんでもらえるようにと開催しているところです。



中種子町連合青年団

また、最近では集落等の夏祭りでの交通整理、青年団独自の踊りである「アツチャメ」の披露、イベントでの出店など徐々にではありますが活動の幅も広がっているところです。団員数減少により、活動は大変にはなりましたが、団員各々が活動に積極的に参加してくれるようになり、楽しんで活動できているのではと思います。これからも青年団で出来ることを出来る範囲で精一杯活動していきたいと思えます。

地域の中で育まれること

中種子町立岩岡小学校 校長 犬童 誠司

十一月に町駅伝競走大会が行われた。今年で四十二回目を迎えた大会の内、岩岡校区は何と二十三回の優勝を飾っている。出場選手の確保が難しいことから区間を減らし短縮コースで行われた今回の大会でも、惜しくも連覇とはならなかったが、二位という成績だった。駅伝大会だけでなく各種スポーツ大会において、好成績を収め続けている岩岡校区は、戸数・人口とも町内で一番少ない校区である。当然、人材に恵まれているとは言えない。それでは、岩岡校区の強さはいったいどのような生まれてくるのだろうか。

一つには、何事にも前向きに取り組もうとする意欲に満ちあふれた人々が多く住む地域であることが挙げられる。校区の合い言葉として、「やるるときやらんばや」という言葉がある。小さな校区だからこそ、自分がやらなければという気持ちが強くなり、周りの期待に応えようと努力する姿が、様々な場面で見られる。十一月の駅伝大会へ向けた取組

も、六月にはスタートしている。候補選手が集まり、定期的な練習を重ね、選手として走ることを目標に個人でも努力する。選手として走ることが決まった者はもちろん、選手から外れた者もサポートに回る。試走の際には、校区役員を初め校区有志が交通整理に当たる。大会当日の応援はもちろんだが、各コースを見て、前日に「看板立て隊」が準備した、選手に合わせた看板が選手の後押しをする。選手だけの大会でなく、自分のできることをできる範囲で取り組もうとする校区の方々に支えられて大会当日を迎える。この「やるるときやらんばや」という気持ちこそが、岩岡の強さを支えているものだと思う。

二つ目に、前述のような大人の姿を、確実に子どもたちが見て育ってきているということである。本校の運動会は校区と合同の開催で、児童や保護者だけでなく、地域住民の方々もたくさん参加していただいている。その中に、卒業生である中学生・高校生の姿も見られ、当たり前のように競技役員として運営に協力し、競技種目にも喜んで出場し楽しんでいっている。その姿は見ていなくても清々しい。この卒業生たちも、岩岡校区の中で校区の大人たちが前向きに取り組む姿を見て育ってきた。昨年から本格的に活動を始めた「岩岡エイサー隊」も中・高生が中心となつていっている。このような中学生・高校生の姿をお手本としながら、地域の方々の大きな背中を見て、岩岡小学校の児童も、地域の中で大きく成長を続けている。



岩岡エイサー隊

